

小学校

光村ポケット 英語

Here We Go!

実践紹介



5年 世界の友達1

世界とつながる、はじめの一步に

環太平洋大学
羽田 あずさ先生



光村図書



LINE公式アカウント友だち募集中!
授業づくりに役立つ情報を、
いち早くお届けします。



【教授用資料】本資料は、一般社団法人教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」に則って作成したものです。

5年 世界の友達 1

世界とつながる、はじめの一步に



環太平洋大学
講師

は だ
羽田 あずさ先生

各学年3か所にあるまとめの活動「世界の友達」は、後に続く You Can Do It! に生かすためのインプットであると同時に、異文化への理解を促すことを主眼とした教材です。世界12か国に暮らす小学生のメッセージを映像で紹介しており、英語の母語話者だけでなく共通語として英語を話す小学生も登場します。さまざまな英語に触れながら各国の生活や文化を知り、多様性への理解と他者への共感を育てたいものです。とはいえ、登場する国や文化は、児童にとって最初から身近なものではないかもしれません。そんな時こそ教師の出番です。

今回は、教師が児童と一緒に異文化についての発見を楽しみながら教材を自分ごとに工夫をご紹介します。

●導入は出会いを生かして

教科書を見ると、世界の小学生がいろいろなところに登場していることが分かります。たとえば、5年 pp. 46-47「世界の友達 1」で登場するノルウェーのマチルデさんと南アフリカ共和国のタボンガさんは、この教材が「初対面」ではありません。マチルデさんは、前見返しや Let's watch and think.

(p. 22, 32) でも登場しています。タボンガさんも前見返しと p. 22 で登場しています。この出会いをぜひ生かしたいですね。

実践アイデア

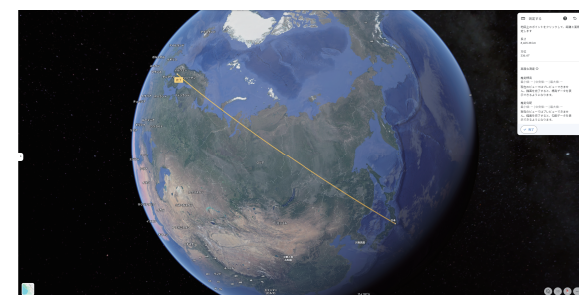


Here We Go! 5年 pp. 46-47

「実はもうこの子たちに出会ってるんだよ。どこで出会った?」「どんなことを言っていた?」と質問してみましょう。児童は教科書を戻って探したり、登場する教材の映像を見直したりするでしょう。反対に、初めて登場する小学生の場合は、「次はどこで出会うと思う?」と投げかけて期待をもたせるのも効果的です。ストーリーのキャラクターと同様に、繰り返し出会う中で児童は親しみを感じるようになります。

●教材を「自分ごと」に カギになるのは、よく知る自文化

登場する小学生に関心をもったところで、「この子たちの国のことをもっと知りたいんだけど、ノルウェーや南アフリカのことで知っていることはある?」と問いかけてみましょう。世界地図や Google Earth を使って、「どこにある?」「こんなに離れてるんだね。」と話しながら児童と一緒に場所を確認したり、人口や首都、言語などの基本情報を調べたりするのもよいでしょう。



Google Earth で日本とノルウェーの距離を確かめる
Map data ©2021 Google

「世界の友達」には、映像の他にも、その国の文化が分かる写真や情報が掲載されています。「ノルウェーは魚がおいしいんだって。日本もおいしいよね。どんな魚料理を食べる?」「マチルデさんは家族でデンマークに遊びに行ったんだって。みんなはどこに行く?」など、自分のことや日本のことと比較しながら自文化についても気づきを促します。文化を比較することで、相違点だけでなく共通点や類似点も見つかります。たとえば「雪が降っても外で遊びやすいよ。日本はどうかね。」と問いかけると、地域により降雪量が違う国内の多様性にも目を向けることができます。

興味・関心を後押しする教師の「わくわく」

気づきを促す際には、教師も新しい発見を楽しみましょう。「わあ、おいしそう!」「おもしろそう!」といった肯定的な言葉が、児童の異文化に対する受けとめに影響を与えます。よい気づきのあった児童には、「よいところを見つけたね!」「よさを見つければ上手だね!」と価値づけることで、他者や世界に対するものの見方や考え方が育ちます。また、一人の児童の気づきを教室全体で共有することで、気づきにくい子に対してもよい刺激となります。

興味・関心が高まったところで、Let's watch. に進みます。「世界の友達 1」では、ストーリーのキャラクターが世界の小学生にインタビューをします。やり取りを聞いて、「気になることはあった?」と尋ねて児童の好奇心を引き出しましょう。キャラクターの反応の前で音声を止めて、「将太はどんなことを言うと思う?」と予想させるのも効果的です。「Cool!」や「Great.」などのキャラクターの反応は、児童に異文化への肯定的な受容と態度を促します。

●両文化の知識を生かして

「世界の友達」で知った情報は、言語活動の場面設定に生かしましょう。たとえば、p. 96 ではタボンガさんがテーブルマウンテンについて紹介してくれるので、続く単元末の活動で紹介する相手をタボンガさんにしてもよいでしょう。「テーブルマウンテンは平らだから、とがった山を紹介すると驚くんじゃないかな。」など、自他両文化の知識を生かして思考力を働かせ、発信につなげると効果的です。

●おわりに

本資料裏面では、学習支援ソフトを用いて児童同士が交流しながら文化について知る学び方の例を紹介しています。

異文化を扱う教材を通して、児童には文化を比較するスキルとともに、同じであることや違いがあることを楽しむ態度を身につけてもらいたいと考えています。教師と児童と一緒に新しい発見を楽しみ、自分とは異なる文化を肯定的に受けとめた言葉が教室で飛び交うことを願っています。

学習支援ソフトで授業をアップデートしてみませんか？

第4回

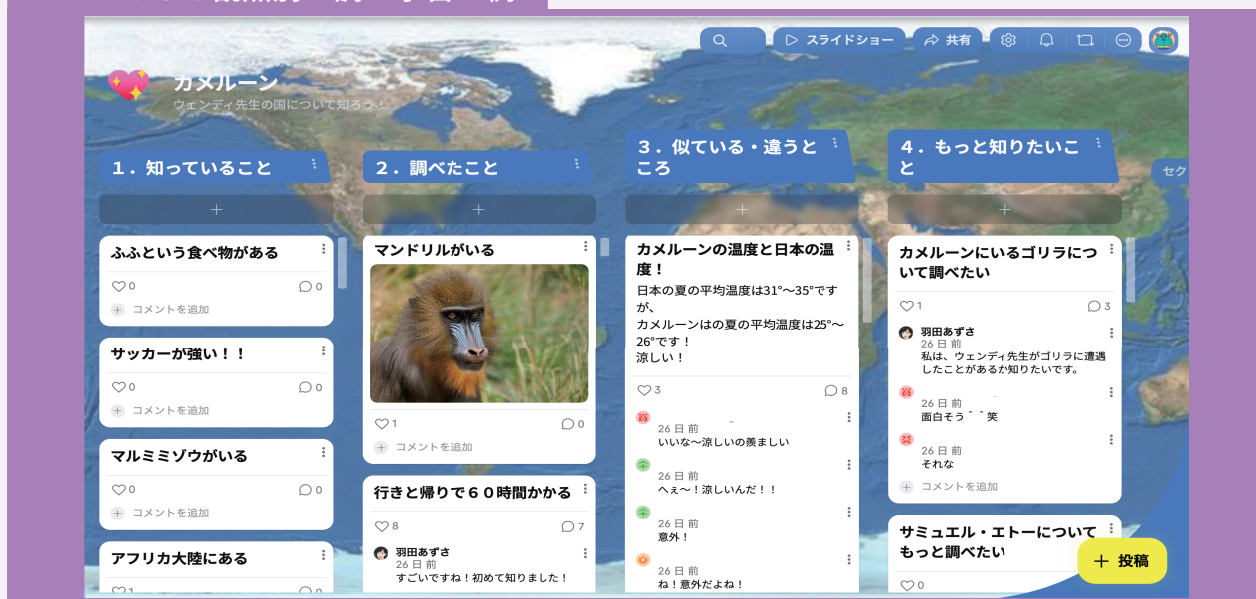
Padlet で児童の気づきや興味・関心を可視化する



環太平洋大学 講師 羽田あずさ先生

児童が題材を「自分ごと」にするためには、児童同士で交流する機会を設け、学び合う段階を設けることが大切です。その際、私は Padlet[※]を活用した調べ学習を授業に取り入れています。

Padletによる観点別の調べ学習の例



この授業では事前に、ALT に児童へのメッセージ動画の準備をお願いし、授業の冒頭で視聴しました。動画から、ALT の出身国であるカメルーンの国旗の色や言語、有名なスポーツ選手や食べ物について情報を収集します。ALTを通してカメルーンについて興味が高まったところで、教師が「他に知りたいことある？」と投げかけて、児童同士の調べ学習につなげます。Padletを活用すると、「知っていること」「調べたこと」「似ている・違うところ」など、観点ごとにそれぞれの気づきや考えを一斉に可視化することができます。

また、友達の書き込みを手がかりに「もっと知りたいこと」を書き加えることで、国や文化をより多角的に見ることに繋がります。よい視点をくれた友達に「いいね」を送るよう促すと、互いの書き込みをよく読んで認め合う学級づくりにも繋がります。

このように、まずは児童同士で調べたことをもとに教材への興味・関心を高め合い、その後、教師が児童のやり取りをふまえて気づきを促すと、児童の好奇心はさらに深まるでしょう。そのうえで、ALT に新しく知ったことについての感想を伝えたり、もっと知りたくなったことを尋ねたりすると、文化に関する知識を言語活動に生かすことができます。

※ Padlet…オンライン上で付箋のように情報を共有・整理できる多機能掲示板アプリ



光村図書

教授用資料

発行者 吉田直樹
発行所 光村図書出版株式会社
〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9
電話:03-3493-2111(代表)
デザイン なるせよぞら

光村図書ウェブサイト

光村図書 | Q

